

対人援助専門職へと導く要因

Factors Leading to Becoming a Helping Professional

小 山 顕*

Abstract

The purpose of this study was to investigate personal factors leading to becoming a helping professional. According to the Consumer Reports (1995, November), no specific modality of psychotherapy did better than any other for any disorder; psychologists, psychiatrists, and social workers did not differ in their effectiveness. The result of the report suggests that there is another crucial ingredient that makes psychotherapy work and effective other than any specific theory. However, the question is what really makes therapy work and also not to work? I hypothesize that motivators leading to becoming a helping professional are the key elements which strongly affect the quality of the work, the helping relationship, and the course of action. In this paper, I discussed both functional motivators which promote eventual professional success and dysfunctional motivators which sabotage attempts to achieve them. I also discussed the importance of developing an applicable program that helps self-awareness of future helpers at a training institute.

キーワード：対人援助専門職、動機、専門職の養成

はじめに

対人援助専門職に就く者にとって興味深いある一つの報告がなされている。1995年に米国で実施された心理療法の効果に関する大規模な調査(ConsumerReports, 1995)の結果、改めて心理療法の有効性が認められることとなった。しかしその一方で、サイコロジスト、精神科医、家族療法士(MFT)、ソーシャルワーカー(CSW, PSW)などの心理的介入を行う対人援助専門職の職種や使用する心理療法の理論モデルについての有意差は認められなかった。この報告は、心理専門職のみにとどまらず、ソーシャルワーク、保育、教育、医療等の近接する領域において従事する者たち、いわゆる対人援助専門職に就く者たちにとって大きな意味を持つものではないだろうか。なぜならば、この調査の結果は、援助を行う者の身分や方法だけでなく、対人援助に貢献する他の要因があるということを示唆していると考えられるからである。時をほぼ同じくして、LambertとBergin(1994)は、心理療法が来談者に肯定的な変化をもたらす要因は、特定の心理

療法のモデルに沿った介入技術そのものよりも、その枠を超えて対人援助の専門家が共有している部分にあるという研究の結果を報告している。

しかし実際のところ、心理、ソーシャルワーク、保育、教育等を含む対人援助専門職を目指す者たちが学び、トレーニングを受ける養成機関において、他者を援助する者となるために、また効果的な働きを継続していく(持続可能な援助の実践の)ために、援助者やその道を目指す者自身が課題として取り組む必要のある自らの内的側面に光を当てることを促す機会が十分に提供されているとは言い難い(Corey, 1998)。

そこで本稿では、領域は違えども対人援助の専門職に就く者たちが共有し、対人援助職の基礎となる部分にあたる、その職へと導く要因(動機)について焦点を当て考察する。紙幅の関係上、それぞれの対人援助職に特徴的に見られるであろう独自の動機全てを挙げ、詳細に言及することはできないが、基礎として共有していると思われる事柄について述べることで、個人を対人援助の職へと誘い、その援助実践の在り方に多大な影響を与える「動機」と、そ

* Ken OYAMA 聖和短期大学

の重要性について明らかにすることができればと思う。

対人援助職へと導く動機

一般的に人が職業を選択していく動機は、その個人の性格、その職への適性、個人的な体験などの相互作用から生まれる（堀越ら、2002）。そうした動機には意識されているものと、そうでないものがあり、最終的にその者を対人援助の専門家としての成功や満足へと導く場合もあれば、それとは逆の方向へと導く場合もある（Guy, 1987）。以下においては、まず対人援助職の支えとなり、効果的な援助へと導くであろう動機を機能的要因とし、さらにそれらの要因を性格、能力、徳性とに分類する。また、不健全であると思われる動機を非機能的要因とし、それぞれについて具体的に述べることにする。

1. 機能的要因

性格

1) 好奇心・探究心

個人を対人援助の専門職へと導くと思われる大きな要因として「性格」が考えられる。おそらくその中でも最も明白な資質として挙げることが出来るのが、他者に対する好奇心（Storr, 1979）であろう。人々に対する深い関心と、自身と他者に対する生来の好奇心、特に人間の行動に関して興味を持つことが必要とされ、機械的、また科学的な部分よりも人間の主観的な感情などに興味を持つことが求められる（Dent, 1978）。人間に対する好奇心のみが、対人援助の職に就く者を支え、効果的な援助の提供を可能にするということではないが、保育、教育などのように、日々、子どもと関わる職を目指すのであれば、まず、子どもが好きであるということが望まれる。また、対人援助を行う者にとっては、人の感情や動機などを含む、人間の体験や人生に関する深い理解への欲求である探究心を持っていることも対人援助専門職としての重要な要素である（Marston, 1984）。

2) 社交性

好奇心・探究心と関連する事柄ではあるが、対人援助を行う者には、他者との関わりを、緊張や特別な心的エネルギーを必要とせずに、気軽に自然体で持つことができる能力（藤村, 2011）である社交性

が備わっていることが望ましい。社交性を有する者は、対人援助の現場においても比較的容易に他者との関係の範囲を拡大していくことが可能になる。

3) 内省性

対人援助の専門職に就く者の多くは、自然な傾向として、内省性を持ち合わせていることが多い。この性質は、対人援助の現場において、相手の感情を受け止め、理解することを可能にさせるだけでなく、援助相手の自己探求の深まりを促進するために必要とされる援助側の開かれた態度、純粋さ、関わり易さを持って、より自由に援助の関係を創りあげていくことを可能にさせる。

4) 相手への温かさ・思いやり

他者に対して温かさを持ち、寛容で、忍耐深く、批判的でないということは、その援助を円滑に遂行していくために、対人援助専門職が持ち合わせている必要のある性質である。

5) ユーモアがある

悲しみと喜びが折り重なり合う人生の出来事に対して、ユーモアを持って対応し、それらを楽しもうとすることが出来る者は、対人援助職に適していると思われる。実際、援助の過程においても、適切なタイミングで、適切なマナーのもとにユーモアが活用されるならば、それは精神的な治癒をもたらすとされている（Saper, 1988）。

能力

1) 聞くことが出来る

相手の話を正確かつ援助的に（相手が援助的だと感じる形で）聞く能力は、対人援助を行うにあたり最も重要な事柄の一つであろう（Rogers, 1951）。この種の職に魅かれる者の多くは、もともとその能力を持っており、自分が話すことよりも、相手の話を聞くことを楽しむことが出来る。近年では心理専門職のみならず、保育、教育の分野においても、保護者等に対する相談援助の重要性と、それを適切に実践するための磨かれたスキルを身に付けた保育者、教育者養成の必要が益々高まっている。聞く能力はトレーニングによって向上させることも十分可能だが、その態度が自然に備わっていることがより望ましい。

2) 話すことが出来る

聞くこととは対照的ではあるが、違和感なく話すことができる（会話できる）ことも、対人援助職にとって非常に重要な能力の一つである。多くの場合、相手との会話を通して（勿論、行動も必要だが）援助が遂行される。よって、この職に就く者は、言語的な能力にある程度長けていることも求められる。話すことに強い不快感を覚える者がこの手の職に魅かれることは稀であり、その適性は低いと考えられる（Guy, 1987）。

3) 共感力・理解力

共感力や理解力は、ただ聞くことのみによってだけでなく、深い理解と共感とによって援助者が相手の世界に入ることを可能にさせるものであり（そのことにより援助における信頼関係が形成されていく）、対人援助を遂行するにあたって必要不可欠な要素である。この能力は Farber (1985) が psychological-mindedness と呼ぶ、自分自身と相手の行動、思考、感情の持つ意味や動きを追いかけることが出来る力のことである。

4) 感情的洞察力

Rogers (1961) はこの能力によって援助者が、援助に必要とされる相互的な関係づくりをより自由に行うことが可能になり、相手の成長と精神的な回復を促進するとしている。援助者には、援助の過程において表されるであろう悲しみや怒り、喜び、失望、驚き、憤慨などの感情をただ受け止めることだけが要求されるのではなく、時にそれらの感情の表出を促すことも求められる（Storr, 1979）。自分自身と相手の感情を幅広く認識し、それらを抵抗なく自然に感じ取ることが出来ることは、対人援助の職を全うするために重要な要素である。

5) 自制力

対人援助の関係の中では、援助者に自身の欲求を制する能力が求められる。援助者自身の欲求に勝って、相手の最善、また必要や関心を優先できるということが必要不可欠である。一般的に援助過程においては、援助職側と比較するならば、圧倒的量の差で援助を受ける側に自己開示が求められる。その意味において、援助者は一方通行色の強い関係に自身の身を浸すことになる（Greben, 1975）。自らを制

し、このような状況に耐えることが難しい者は、対人援助専門職に適しているとは言い難い。

6) 待つことが出来る力

援助者には、援助過程の様々な場面において待つことが必要とされる。この意味は単に援助者からの語りかけに対する相手からのレスポンスを待つということに制限されるものではない。相手の理解のスピード、行動に移すスピード、そして成長のスピードはまちまちであり、決して援助する側が思い描いた通りの一本道を進むわけではない。そういった時、たとえ遠回りだと思われるようなコースを通ったとしても、援助者がその客観性を維持し、援助の目標（ゴール）を見据えた上で、その時の相手のペースに合わせて援助の過程を歩む、いわば相手と“一緒にダンスを踊る”ことができるかは重要な資質として問われる。

7) 曖昧さに耐えることが出来る力

援助の過程においては、しばしば援助相手が混乱し、曖昧模糊とした状況に陥ったり、繰り返し危機に瀕するということが起こる。しかし、援助者はその様な状況に出くわした時でも、短絡的な答えを与えたくなくなるなど、自身を操作的にならせようとする誘惑に打ち勝ち、援助相手の自己決定権を認め、それを尊重し、相手が自分なりの解決策を見出せるよう励ますことが重要である（Biestek, 1957）。通常、対人援助は、時間を要し、骨の折れる作業である。よって、援助者には、懸命な努力の後に訪れる、掲げていた理想とは異なる限られた成果（成功）に対しても満足できるということが求められる。

8) 健全で親密な関係を作る・維持する力

対人援助専門職に就く者には、援助関係の中において援助者側と援助を受ける側の両者に喚起される様々な感情を適切に取り扱い、抵抗や誤解などが生む困難の中にあっても、相手の成長、回復、自立を促すことを目的とした健全であり親密な関係を生みだし、それを維持する能力が必要とされる。しかしこれは決して容易なことではない。援助者も自身の日頃の人間関係のパターンを援助の場に持ち込んでいる（堀越ら, 2002）と考えるならば、自分自身の日頃の生活における他者との関係作りの在り方が重要となり、それを吟味する必要がある。

9) 力（影響力）を適切に行使することが出来る

対人援助専門職に就く者の存在は、しばしば、その援助を受ける者の人生に大きな影響を与えるということは疑う余地のない事実である（Guggenbuhl-Craig, 1979）。対人援助専門職が、援助の対象となる相手の考えや行動に影響を与えるということから逃れることはできない。故に、援助関係の中において、その力を適切に行使できるということが効果的な援助実践の一つの重要な鍵となる。パターンリズムや万能感に浸るという状況に陥ることなく、対人援助者が相手の自己決定権を尊重しつつ適切にその援助を遂行していくことが求められる（本田, 1989）。援助の関係の中において、“専門家”ということで相手から理想化されることや、相手が自身の課題と向き合えるよう促すことに違和感を持つ者は、結果的に援助の過程を妨げてしまうことになる。

徳性

対人援助の専門職に就く者に必要とされる資質について語られるときに（その機会自体、多くはないが）、個人の性格や能力について取り上げられることはあっても、“徳性”（Virtue 又は Moral Character）について焦点があてられることは稀である。しかしながら、ここでは援助者にとって必要不可欠であると思われる、思いやり（Caring）、勇気（Courage）、慎重さ（Prudence）という三つの徳性（Doherty, 1995）を取り上げ、それぞれについて触れてみたいと思う。

1) 思いやり

思いやりについては、機能的要因となる性格の一要因として既に取り上げたが、もう一度ここに、対人援助専門職が有している必要のある徳性として取り上げ、触れたいと思う。

全ての対人援助専門職に就く者の徳性の中心をなすものが、自身の持つ課題や痛みを援助者にゆだね、預けてくれる相手を思いやることができるということである。この他者への思いやりに基づいた結びつきこそが、対人援助を効果的かつ、意味あるものとするのである。援助者が醸し出す、温かく、安全で受容的な雰囲気、援助職のどの領域においても、相手の成長や回復を生み出す原則となる。思いやりという徳性の欠落は、援助の失敗の主たる要因

であることは、多くの研究により実証されている（Patterson, 1985）。故に、思いやりは、援助者にとっての礎となる徳性である。

2) 勇気

援助者には、援助相手が自分自身の抱える課題が何であるかを認識し（課題の明確化）、その課題と向き合うことができるように助け、促すことが求められる。課題を示すことにより、援助関係の中に波風（抵抗、誤解、様々な感情など）が起こることを援助者が過度に恐れることなく、専門職としてその職務を果たすために、勇気を持って相手と向き合うことが出来るが問われるのである（ただし、勇気のみではその職務を適切に果たすことはできない。このことについては次で述べることにする）。

対人援助職に必要な徳性である勇気のもう一つの側面として、「援助者が自分自身と正直に向き合う」ということを挙げる事ができる。このことはおそらく、援助者にとっての勇気の本質的な形であろう。援助者が相手に対する自身の感情的反応を認識し、それと誠実に向き合うということこそが、最も勇気を要する作業である。しかし、このプロセスを抜きにして、適切かつ効果的な援助の遂行はありえない。

3) 慎重さ

他の全ての徳性を統制するという点からも、慎重さこそ、最も重要な徳性であると言っても過言ではない。「慎重さ無き勇気」は、危険へと誘い、「慎重さ無き思いやり」は、個人の自主性の侵害へとつながる。慎重さを換言するならば、思慮分別のある行動方針の選択（優れた判断）を可能にさせる資質と言えよう。援助者は、その日々の活動において、科学的、臨床的確証を必ずしも得ることが出来ないという不確かさの中に置かれながらも、援助相手の生活に密接につながった個々の事柄に対し、専門職として数多くの決断を下すことを迫られる。効果的な援助者の姿を表す一つの特徴は、一貫して適切なタイミングで適切な行動をとるということであり、それを支えるのが慎重さという徳性である。そういった意味では、タイミングの眼識はこの徳性を兼ね備えた援助者の証明である。良いタイミングが良い援助を生み、絶妙なタイミングが優れた援助を生む（Doerthy, 1995）。逆に、タイミングのまずさは、

援助を非効果的にする最も一般的な要因である。対人援助の専門職に就く者は、自分自身が相手を助けることが出来る力と同様に、相手を害する否定的な力をも有しており、場合によってはそれを行使してしまう可能性もあるということを自覚しなければならない。それ故に（新約聖書に記されている言葉を言い換えるならば）、たとえ援助者に思いやり、勇気、その他の徳性があつたとしても、またどんなに素晴らしい訓練を受けていたとしても、もし慎重さが欠けているとするならば、それは無に等しい。

2. 非機能的要因

対人への援助を適切かつ効果的なものとし、援助者自身の個人的成長をも促す力を強めることにつながるとされる、個人を対人援助職に導く健全な動機である機能的要因がある一方で、援助専門職の効力を徐々に妨げ、ついにはその個人を非機能的にさせる不健全な動機がある。折悪しく、この危うい動機に導かれ、対人援助の専門職に就こうとする者もいる。

1) 精神的苦痛

Corey ら（1998）は、対人援助専門職を選ぶ者の中には、その隠された動機として自らの抱える精神的苦悩の理解とそれからの解放をこの職に求めている場合があると述べている。対人援助を行う者で自身の問題や傷を全く持っていないという者はいない。例えなんらかの問題から来る痛みを抱えていたとしても、それが専門職としての養成プログラムやスーパービジョンなどにより適切に扱われるならば、かえってその経験がその者にとって対人援助職としての機能的な要因となり得る。傷を負った経験があるからこそ、自己探求の途上にある相手に寄り添い、共感を示し、成長・回復のための援助が可能になる。しかし、自分自身の問題が重篤であるにもかかわらず、一定の解決を見ぬまま置き去りにされている場合、その問題を抱えたまま相手と向き合った時に援助者自身の内側に喚起される切迫感や痛みなどによって、相手の表す感情に対する適切な共感や援助に必要とされる客観性の維持が困難となり、結果的に相手に対して非援助的な言動や行動を起こしてしまうことがある。

2) 援助者が援助関係を自身の課題処理の場とする

先の精神的苦痛とも関連することだが、援助者側に取り扱われることが必要な明らかな問題がある場合、援助の過程において、同じような問題を持つ相手と向き合う時に、援助者が無意識に、または意識的に自身の課題の解決のために、本来なすべき援助の枠を超えて、必要以上に相手の課題にのめり込んでしまう場合がある。これは、相手を援助する立場にある者が、相手との援助関係を利用し、自分自身が抱える問題の解決を試みようとすることであり、「相手にとっての最善」を行うという対人援助の基本に反することである。

3) 孤独感・孤立

対人援助専門職に就こうとする者の中には、援助を提供することで作られる相手との関わりによって自身の抱える深い孤独感や社会的孤立からの克服を試みようとする者がいる（Goldberg, 1986）。援助者が対人関係の問題や自己表現の問題を抱えているがゆえに、私生活において、友人関係が非常に限られており、周りをつながることが難しく、孤立していることがある。そういった場合に抱える孤独感を援助の関係によって埋め合わせようとすることは不適切である。結果的にこの不健全な動機は、専門職としても個人としても（私的な関係においても）その個人が効果的に他者と関わり、良い関係を築いていくことの妨げとなる。

4) 権力欲

私生活において恐怖心や無力感を覚えている者にとって、対人援助職に付随する力は魅力的に映ることがある（Hammer, 1972）。この動機ゆえに対人援助の職に就いた者には、結果として、援助相手に対して攻撃的になったり、相手を搾取したり、支配的になるといった傾向がみられる（Greben, 1975）。また、相手をコントロールしたいという強い欲求を持っているがために、対人援助職に魅かれ、その道に進もうとする者もいる。その場合、相手の自主性や自己決定権を尊重し、自分自身の人生を適切にコントロールするための力を相手が獲得（再獲得）することを助けるという援助者本来の在り方を示すどころか、逆に援助者がその役割を相手に大きな影響を与えるためや、自分自身の持つ価値観や世界観にそぐうように、相手を変えていくために利用すると

いうことさえ起きてくる。

5) 誤った愛情

優しさや愛情といったものを表したいという強い欲求が、個人を対人援助職へと向かわせる動機となる場合がある。確かに、他者を思いやり、愛情を持って温かく接することが出来るという能力は対人援助職としての機能的な要因ではあるが、援助者自身の内側に不安が喚起されることなくそれらを提供することが出来るかが重要である (Bungental, 1964)。自身の与える愛情や受容こそが相手に大きな変化や成長を起こすと信じ込み、他者を救済している自分に憧れて対人援助の道を選ぶ者もいる。このような自分自身を救世主化する動機は、援助者の全能感の強化につながる。その動機は実のところ、歪んだ自己愛と非現実的な万能感に根差したものであり、援助者が愛されたい、必要とされたいという自身の欲求を満たすために相手を必要とし、搾取する (Hummer, 1972) ことにつながる場合がある。また、この動機に導かれた者は、自分自身は“助け”を必要とする相手の求めに常に応じることが出来なければならないというある種の強迫感 (不安) に根差した思考パターンを持っているがゆえに、他者に“愛情”を注ぎ、救おうとすることに躍起になり、結果として自身のエネルギーが枯渇してしまう、いわゆるバーンアウトに陥りやすい傾向が強いとされている。

6) 反抗心

援助の関係を自身に内在する生育環境や社会に対する反抗心を比較的表しやすい場所であると見なし、その“場”に魅かれ、対人援助職を目指そうとする者もいる。そういった場合、援助者が相手のニーズに目を向け、援助を実践するという本来の役割を果たすのではなく、社会の基準や習慣などに反発したり軽視するように相手を操作し、援助の関係を自身の抱える反抗心の捌け口として利用することさえ起きてくる (Guy, 1987)。これもまた、相手の最善のために援助を遂行するという、対人援助専門職に就く者が持つべく基本的姿勢に明らかに反するものである。もし、援助者が自身の持つこの傾向について全く自覚していないとするならば、その援助活動のみならず、私的な生活面 (他者との関係など) にも多大な否定的影響を及ぼすことに

なる。

まとめ・今後の課題

ここまで対人援助職の基盤となる事柄として、その職へ導くと考えられる要因 (動機) について、機能的なものとは非機能的なものとは分類し、考察した。確かに援助者の動機は援助そのものの在り方を大きく左右することになる要素ではあるが、教育によって、また実習などの臨床訓練や実習中、実習の前後における適切な指導 (スーパービジョン) によって、動機の上で疑わしいと思われる者であっても、自らを整え、成長させることが可能であるということを中心に強調して述べておきたい。

個人を対人援助専門職へと導く要因 (動機) 等の領域に関する研究はまだそれほど進んではいないが、それでも米国などでは、研究の結果を踏まえたカリキュラムが用意され統合的な力を付けた対人援助の専門家を育てようとする気運が見られる (堀越ら, 2002)。特に対人援助専門職の養成機関 (養成校) における初年度の学びでは、一つの学期、または一年を通じて、援助職を目指す者が自身の持つ動機や幼児期の感情的体験、家族関係などを徹底的に見つめ直し、機能的、非機能的両観点から、それらが援助相手との関係の中でどのように作用し得るのか、自身の持つストレスは何か、また個人が成長や回復に向けて取り組む必要のある事柄は何であるのかを深く理解するための課題やディスカッションの機会が数多く提供される。教育分析もその取り組みの一例である。対人援助について学ぶ者がその過程において、教育的分析を受けるということは、援助を受ける側の立場を体験でき、他者が行う援助を間近で見ることが可能にし、そして自分自身が抱える問題に対する取り組みを実践するという意味で非常に大きなメリットを持つ。実際、米国の7割を超える心理専門職の養成機関では、教育分析を必須または、準必須の科目として位置付けている。

一方、わが国では、対人援助専門職に就く者の養成プログラムにおいて、援助者の資質というポイントから、この手に関する事柄が取り上げられることはあっても、(時間的な制限がその大きな理由であろうが)、多くの場合、表層的でその内容も限られたものにとどまっている。結果、その道を目指す者が課題として取り組む必要のある自らの内的側面に

光を当てることを促す十分な機会が提供されているとは言い難い。この状況を改善し、養成のプロセスにおいて援助職を目指す者の自己覚知を適切に促すためには、カリキュラム編成の問題を筆頭に、個人的な情報の取り扱いに伴う倫理面への十分な配慮の保証といった繊細な問題など、クリアしていく必要がある課題が山積している。しかし、本稿において取り上げた対人援助職の基礎となる、その道を目指すにいたった要因（動機）が対人援助に貢献する重要な要素である限り、その事柄を丁寧に扱うことが、対人援助専門職を世に輩出する者たちに課せられている果たすべき一つの重要な役割である。今後は、そのためのプログラム開発や、効果の検証など、この分野に関する研究をより充実させることが必要であろう。加えるならば、養成機関に在籍する者に対してだけではなく、既に実際の現場において援助活動を行っている者たちを対象とした、内的側面に目を向けることを促すためのリカレント教育を含む支援プログラムの充実を図り、それを提供していくことも、対人援助専門職の養成機関に与えられている欠くことのできない責務の一つであろう。

参考文献

- Biestek, F. P. (1957) *The Casework Relationship*. Chicago, Loyola University Press.
- Bungental, J. F. T. (1964) The person who is the psychotherapist. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 272-277.
- Consumer Reports (1995) Mental health: Does therapy help? pp. 734-739. November.
- Corey, M. S. & Corey, G. (1998) *Becoming a Helper* (3rd ed.). Pacific Grove, CA, Books/Cole.
- Dent, J. K. (1978) Exploring the psycho-social therapies through the personalities of effective therapists. (p. 73), U.S. Department of health, Education, and Welfare, National Institute of Mental Health, Baltimore, Maryland.
- Doherty, W. J. (1995) *Soul Searching: Why Psychotherapy Must Promote Moral Responsibility*. New York, Basic Books.
- Fatber, B. A. (1985) The genesis, development, and implications of psychological-mindedness in psychotherapists. *Psychotherapy*, 22; 170-177.
- Goldberg, C. (1986) On Beeing a Psychotherapist: The journey of the healer. New York, Gardner.
- Greben, S. E. (1975) Some difficulties and satisfactions inherent in the practice of psychoanalysis. *International Journal of Psycho-Analysis*, 56, 427-433.
- Guggenbuhl-Craig, A. (1979) *Power in the helping professions*. Irving, Texas, Spring Publications.
- Guy, J. D. (1987) *The Personal Life of the Psychotherapist*. New York, John Wiley & Sons.
- Hammer, M. (1972) *The theory and practice of psychotherapy with specific disorders*. Springfield, IL, Chales C. Thomas.
- Lambert, M. J. & Bergin, A. E. (1994) The effectiveness of psychotherapy. In A. E. Bergin and S. L. Garfield (eds.), *Handbook of Psychotherapy and Behavior Change*. New York, John Wiley & Sons.
- Marston, A. R. (1984) What makes therapist run?: A model for analysis of motivational styles. *Psychotherapy*, 21; 456-459.
- Patterson, H. P. (1985) *The Therapeutic Relationships*. Monterey, CA, Brooks/Cole.
- Rogers, C. R. (1951) *Client-Centered Therapy*. Boston, Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1961) *On Becoming a Person*. Boston, Houghton Mifflin.
- Saper, B. (1988). Humor in psychiatric healing. *Psychiatric Quarterly* 59, 306-319
- Storr, A. (1979) *The Art of Psychotherapy*. Ney York: Methuem.
- 藤村和久 (2011) 保育者特性インベントリーの妥当化 I 大阪樟蔭女子大学研究紀要 第1号 86-96.
- 堀越あゆみ、堀越 勝 (2002) 対人援助職の基礎にあるもの精神療法28(4), 29-36.
- 本田裕志 (1989) *医療におけるパターンリズム* 世界思想社